

日本の仏教と宗教多元主義

救済における論理構造の比較

南部 千代里

一 はじめに

宗教多元主義は、キリスト教文化圏において発案された思想である。そのため仏教文化圏に生きる日本人においては、その構造を把握することが肝要となる。よって本研究は、まず宗教多元主義が出現した経緯を述べ、つぎに今日「この類型を抜きにして、宗教多元主義を論じることがもはや不可能¹⁾」とまで言われているアラン・レイスの「三つの類型²⁾」の特徴を示し、そして宗教多元主義の代表的立場にある哲学者ジョン・ヒック (John Hick, 1922-2012) 以後ヒックに統一³⁾の理論において仏教がどのように理解されているのかを、日本の仏教、その中でも法然・親鸞の浄土宗の視点から、救済に焦点を絞り比較考察する。

二 宗教多元主義の出現

宗教多元主義は、諸宗教の多様性 (Pluralism) を容認する立場

である。この思想が出現した経緯にはさまざまな説があるが、本研究ではキリスト教的視点から述べ、並びにヒックがこれを提唱するに至った経緯についても簡略に述べる。

1 間接要因——自由主義神学の台頭

一九世紀、ドイツを中心に当時主流であったヘーゲル哲学と連結して自由主義神学が誕生した。その代表が、汎神論的な観点から『聖書』批判を試みたダーフィット・シュトラウスとイエスの実在性を否定したブルーノ・バウアーである。その後彼らは旧自由主義と呼ばれるが、旧と新の違いは、アルブレヒト・リッチェルが三位一体／キリスト論を拒絶したように、キリスト教の絶対性を否定した点にある。このように伝統的キリスト教神学に対抗した神学の台頭が、宗教多元主義出現の遠因と言えよう。

2 直接要因——第二バチカン公会議とエキュメニカル運動

第一次世界大戦以降、キリスト教にとって脅威は、異宗教の存在ではなく、宗教の終りを意味する世俗主義の高まりであった。

そのためキリスト教は、諸宗教と協調し合ってこれに対処しようとした。それが、一九六二―六五年の第二バチカン公会議「キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言」⁽⁴⁾である。所謂エキュメニカル運動（諸キリスト教会間の一致協力）の実質的な幕開けである。このように諸宗教間の対話により世界を共同体（地球村）とみるグローバルな意識が、宗教多元主義出現の近因と言えよう。

3 ヒックが宗教多元主義を提唱するに至る経緯

ヒックがパーミンガム大学に移籍した一九六七年当時の英国は、労働力不足を補うためインド亜大陸やカリブ海地域から約二〇〇万人の移民を迎えていた。パーミンガムでもイスラム教徒が人口の二割を占め、ヒンドゥー教やシーク教、仏教徒等も移住していた。しかしキリスト教徒たちは、移民たち「有色人種を劣等だ」と卑下し、彼らの宗教も嫌悪していた。そのためヒックは、異なった宗教背景を持つ人々が一社会で平和共存するためには、「〔神中心〕の考え」を共通基盤とした「統合的な信仰を私たちはもつべきだ」と主張して、「寛容」を徳とする宗教多元主義を提唱したのである。

三 三つの類型

本章では、キリスト教の救済の在り方を区分した、宗教多元主義者A・レイスの「三つの類型」の特徴をヒックの著作から抜粋し、また類型に関する彼の主張の問題点を簡素に指摘する。

1 第一類型 宗教排他主義 (Religious exclusivism)

宗教排他主義は、救済を「一つの特定の伝統に限定する」⁽⁹⁾。よって、自宗教以外の宗教は救済から排除する。これの典型が、イエス「この人による以外に救いはない」(使徒4:12)と考えるカトリック教会の「教会の外に救いなし」であり、プロテスタント教会の海外宣教における「キリスト教の外に救いなし」である。

2 第二類型 宗教包括主義 (Religious inclusivism)

宗教包括主義は、救済を「キリスト教の歴史のなかだけに限らず、他のすべての偉大な世界宗教の伝統のなかにも生じる出来事として見る」⁽¹⁰⁾。イエスの贖罪によって齎された神の恩寵は、キリスト教徒に限定されず、たとえイエスの名を知らなくても信仰者すべてに施されているという理解である。

3 第三類型 宗教多元主義 (Religious pluralism)

宗教多元主義は、キリスト教徒が「天の父」と呼ぶその神を「実在者 (the Real)」「神的実在 (the divine reality)」⁽¹²⁾と呼び換えて、宗教とは「いづれもが神的実在に対するそれぞれの経験であり応答である」と定義した、万教帰一的「新しいキリスト教観」⁽¹³⁾である。よって「二」なる神的実在に「全面的に自分を捧げることが、われわれの究極的な救い」⁽¹⁴⁾となる。そのためナザレのイエスは「孔子、ブッダやマハーヴィーラ、「中略」ピタゴラスやソクラテスやプラトン」と同じ「精神的教師」⁽¹⁵⁾であって、神であったとは受けとめない。十字架に関する神話はメタファーとして解釈する、所謂非神話化である。

4 類型の等級づけ

ヒックは、宗教排他主義を天動説に譬えて「古くて粗末なプロテスタントの神学」と呼び、これと比べて宗教包括主義は救済を限定しない点において優れているが、それでもキリスト教の優越性を前提としていることから「古いドグマの内容がまだ十分には骨抜きにされていない」と誇り、宗教多元主義を地動説に譬えて「コペルニクス革命」の如く、時代に最も即した教理であると表明した。問題は、彼が、宗教を同等に評価すべきであると主張しながら、他方ではそれを翻している点である。つまり、排他より包括、包括より多元と類型を「等級づけ」していることである。これは、まるで多元主義が優で、排他主義が劣、あるいは「倫理的な悪」であるかのような印象を人々に与えてしまう可能性がある。そのため梅津光弘は、宗教多元主義者が案出した Exclusionism の排他を、宗教的信念の積極的側面と捉える「専心」に置換することを提案している。¹⁸⁾

四 日本の仏教と宗教多元主義

宗教多元主義は、日本人の宗教意識（本地垂迹説）からも課題となり難い傾向にある。しかし稲垣久和は、日本社会では、それは信仰人口が極少数のキリスト者ではなく、大多数の「仏教者が真剣に取り組むテーマではないか」と述べている。だが彼は、自身がキリスト者であるためか、仏教者がこれをどのように解釈すればよいかは論じていない。よって本章では、この課題に関して考えてみたい。

1 宗教多元主義における仏教理解

ヒックは、異なった宗教背景にも拘らず移民たちの「礼拝の現象学的類似」²⁰⁾から、キリスト教だけでなく、イスラム教やシーク教、ヒンドゥー教でも拝されている「その神がまさしく人類全体の神である」と断言した。また「キリスト教における神の像」が「阿弥陀信仰の仏教徒たちによつては真に礼拝されることがありえないと仮定する必要はない」とも確言した。換言するならば、仏教徒がキリスト教の神を真に礼拝することが「ありえる」ということである。つまり、すべての宗教の信仰対象は神的存在であるから「ありえないと仮定する必要はない」という意味である。そして、キリスト教が「もし」インドに伝わっていたならば、イエスは、ヒンドゥー教であれば「神の権化」、仏教であれば「菩薩」と讃えたであろうと仮想した。よってヒックの救済の論理構造においては、「キリスト教の神と阿弥陀仏」「イエスと菩薩」とは「現象学的には同一の霊的実在」と捉えるため、代替は「可能」となる。²⁴⁾

このように、ヒックは信仰者の心理を度外視した救済の論理を展開している。しかし宗教とは、親鸞が「たとひ法然聖人にすかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ」（『歎異抄』第二条）²⁵⁾と、使徒パウロも「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者にとっては神の力です」（1コリント11:18）²⁶⁾と語ったように、客観的知の立場以上に主体的信の立場を第一とする。救済される者にとって救済者への帰依は、東西を問わず「二途」²⁷⁾で

ある。信仰とは、生死の問題として、この道しかない、「二本の筋金」⁽²⁸⁾のようなものである。高田信良が「親鸞の選択的・排他的な姿勢は法然にしたがっているのである」と述べたように、自宗教を徹して信じきるならば、他宗教に対し、どうしても独善／排他的な態度をとるようになるのである。

ヒックは、宗教は「どれも救済論的構造は根本的に類似している」⁽³⁰⁾、ゆえにキリスト教の神と阿弥陀仏の代替は可能であると公言した。しかし仏教徒においては、キリスト教の神は「撰取不捨」(『歎異抄』第一条)ではないゆえに、代替は不可である。仏教とキリスト教は救済の目的、つまり「他力」による万民救済においては相似するが、救済の論理においては相違している。すなわち、二者の思想構造を直視するならば、西田幾多郎が迷いの中で苦しむ凡夫を「ただ汝のために我は粉骨碎身せり」といつて、これを迎えられる⁽³¹⁾と言った阿弥陀仏と、「仏教徒たちが根本的に拒絶する、人間的主体と神とのあいだの三元論を前提にしている」⁽³²⁾キリスト教の神とは、同一視できない。また「イエスと菩薩」の身代り受難の観念も、中村元がキリスト教における贖罪は「キリスト独りによってなされる」⁽³³⁾が、仏教では「いかなる菩薩によってもなされる」と相違点を明示したように、二者は同一視できない。よって、神概念がまったく適切性をもたない仏教と宗教多元主義とは、本質的に異なる救済の論理を用いている、と言わざるを得ないのである。

2 仏教の位置

ヒックは、「宗教共同体はすべて、究極的には唯一の神が存在す

ると主張する点で一致している」⁽³⁴⁾と宣言した。しかし大半の共同体は、実際、宗教包括主義的立場に留まっている。そのため彼は、宗教包括主義が宗教多元主義へと「パラダイム変換」する前形態であると共同体が理解したならば、彼らを「多元主義へと向かわせないではおかまいだろう」⁽³⁵⁾と揚言した。

ヒックの主張に従うと、世界宗教である仏教は、宗教多元主義的救済の論理を展開しなければならないこととなる。しかしながら仏教では「一切衆生悉有仏性」、仏は仏性に基つきあらゆる人間に慈悲を注ぐと説く。よって、仏教を三類型のどれかに当て嵌めるとしたならば、仏教は宗教包括主義的立場に留まると考えられる⁽³⁶⁾。

しかし、先述の三—4「等級づけ」からすると、仏教が宗教包括主義に留まるならば「古い教理の諸前提を踏み越えていない」劣った位置にあると見做されることとなる。しかし仏教から宗教包括主義的救済の論理を排除すると、仏の慈悲は限定されたものとなる。すなわち、仏は仏教徒しか救済しない救済者となる。ゆえに、たとえ古いと批難されようとも、仏教は十方の衆生を仏の子としてみる根本思想から、どうしても宗教包括主義の立場に留まらざるを得ないのである。

したがって、人間の苦、すなわち煩惱を無くすことによつてそれを克服し、平安に生きる道を釈迦によつて生み出された仏教は、確かに、国境や民族、言語、文化の壁を越えた世界宗教ではあるが、かといって無条件で宗教多元主義を受容するものではないのである。

五 おわりに

ヒックは、救済の区分を三類型に限定し⁽³⁷⁾、どの宗教も「一」なる神的存在を拝している、よって救済は同一であると、宗教平等論を説いた。これにより宗教上の偏見と差別が払拭され、宗教間の誤解と闘争に終止符が打たれる、世界平和実現のためには必要な理論であると、ユニテリアン⁽³⁸⁾を始めとして、信楽峻磨が「私は基本的には、浄土宗、浄土真宗においても、この宗教多元主義の主張に対しては、賛意を表すべきであると思う」と発言したように、日本ではキリスト教徒のみならず仏教徒にもその影響はみられる。

しかし、すべての宗教が神的存在を拝しているのであるならば「仏教徒である」ことの必然性はなくなるのではないか。また「ブツダ」は古代ギリシアの数学者や哲学者たちと同じ「精神的教師」の一人に過ぎないのか、といった疑問が残る。それは、ヒックが彼の神中心主義に非有神の仏教を組入れて理解したからに過ぎない。そのためウエスレー・アリアラジャは「神中心的理解とは、他の人々に押しつける新しい枠組ではない」と⁽⁴⁰⁾と明示し、武田龍精は親鸞思想の立場から「reality、それが何であるのか」と問うている。

そのため本研究では、日本の仏教と宗教多元主義に共通する概念である救済を軸として、比較検証と相互批判を試みた。その結果、両者は救済の目的、すなわち他力による万民救済においては相似するが、構造においては相違していることが顕著となった。

つまり、神概念がない仏教と宗教多元主義との根本的な相違が明らかになったのである。

以上から、今後の諸宗教は、救済において各宗教が果たすべき役割と責任を、他者との比較ではなく各々が「唯一」であり、自宗教の信念を全うしながら、他宗教の歴史や文化、聖典、儀礼、信条等との相違点を客観的に理解し、尊重し合うことが重要となる。また「多元主義と寛容は世俗化の落とし子⁽⁴²⁾」であると言われるように、一神教も多神教も神を立てない仏教も同一視し、普遍性だけを取上げて特殊性を切捨てるならば、『仏典』のない仏教、十字架のないキリスト教となり、信者は信仰対象を見失い、延いては宗教そのものの存続が危ぶまれることとなりかねないのである。よって、宗教多元主義は、神中心主義を共通基盤とした「統合的な信仰」による平和を標榜しているが、中村元が「平和」という語の意味する内容が、仏教とキリスト教とは決して同一ではない⁽⁴³⁾と断言したように、今後の日本の仏教と宗教多元主義は、救済に繋がる「真の平和が何か」ということをも比較研究に基づいて論議することが極めて肝要となる、と見えよう。

(1) 根岸敏幸「宗教多元主義の位相」間瀬啓允編『宗教多元主義を学ぶ人のために』世界思想社、二〇〇八年、二二頁。

(2) Alan Race, *Christians and Religious Pluralism: Patterns in the Christian Theology of Religions*, London, SCM Press Ltd., Second edition, 1993, pp.10-105. 邦訳は出版されず。

(3) キリスト教弁証家C・S・ルイスは、自由主義神学を「水割りのキリスト教」と呼んでいる。「天には善なる神がいます、万事めでたく何も言うことなし」と、救済に拘る「やっかいな教義はすべて素通りしてし

- まう」からである。C・S・ルイス『キリスト教の精髓』柳生直行訳、新教出版社、一九八三年、七七頁。
- (4) 『第2パチカン公会議・公文書全集』監修南山大学、中央出版社、一九八八年、第四刷、一九七二〇頁。
- (5) パーミンガム大学に移籍するまでのヒックは、米国プリンストン神学校教授であった。しかし一九六二年長老派教会の教職者としての信仰告白を余儀なくされ、その場で彼はイエスの処女降誕などに関して自分をこれを肯定できないと発言した。そのため会議にかけられる。教会側が出した結論は、牧師と教授資格の剥奪であった。ジョン・ヒック『宗教多元主義——宗理解のパラダイム変換——』間瀬啓允訳、法蔵館、一九九〇年、一九—二〇頁。John Hick, *Problems of Religious Pluralism*, London, the Macmillan press Ltd., 1985, p.2.
- (6) ジョン・ヒック『キリスト教の絶対性の超克』キリスト教の絶対性を越えて——宗教的多元主義の神学』八木誠一・樋口恵訳、春秋社、一九九三年、四九頁。John Hick and Paul F. Knitter, *The Myth of Christian Uniqueness*, London, SCM Press Ltd., 1987, p.19.
- (7) ヒック、前掲『宗教多元主義』二〇頁。原著、p.65.
- (8) ジョン・ヒック『宗教多元主義への道』間瀬啓允・本多峰子訳、玉川大学出版部、一九九九年、一九九頁。John Hick, *The Metaphor of God Incarnate*, London, SCM Press Ltd., 1993, p.147.
- (9) 同書、六五頁。原著、p.31.
- (10) 同書、六八頁。原著、p.33.
- (11) 信仰に生きる者すべてを「無名のキリスト教徒」と見做す。カール・ラーナー『人間の未来と神学』稲垣良典訳、中央出版社、一九七五年、九三—一〇〇頁。
- (12) ヒック、前掲『宗教多元主義への道』一七三頁。原著、p.134.
- (13) 同書、一〇七頁。原著、p.80.
- (14) ヒック、前掲『宗教多元主義』七八頁。原著、p.39.
- (15) ヒック、前掲『宗教多元主義への道』二二七頁。原著、pp.95-96.
- (16) ジョン・ヒック『宗教がくぐる虹』間瀬啓允訳、岩波書店、一九九七年、ix—x頁。John Hick, *The Rainbow of Faiths*, London, SCM Press Ltd., 1995, p.ix.
- (17) ヒック、前掲『宗教多元主義』二二四頁。原著、p.69.
- (18) 梅津光弘『倫理的に見た宗教多元主義』間瀬啓允・稲垣久和編『宗教多元主義の探求——ジョン・ヒック考——』大明堂、一九八五年、一—一頁。
- (19) 稲垣久和『公共の哲学の構築をめざして——キリスト教世界観・多元主義・複雑系』教文館、二〇〇一年、九七頁。
- (20) ジョン・ヒック『神は多くの名前をもつ』間瀬啓允訳、岩波書店、一九八六年、一〇二頁。John Hick, *God Has Many Names: Britain's New Religious Pluralism*, London, Macmillan Press Ltd., 1980, p.48.
- (21) 同書、viii頁。原著、p.viii.
- (22) 同書、一二三頁。原著、p.58.
- (23) ヒック、前掲『宗教多元主義への道』一五一頁。原著、pp.70-71.
- (24) ヒックは、キリスト教以外の宗教も「究極的には一つの超越的な神の実在に対する応答の、それぞれに代替可能な人間的脈絡を構成している」と明言している。前掲『宗教多元主義の探求』四頁。
- (25) 『歎異抄』金子大栄校注、岩波書店、二〇〇三年、第一七刷、四三頁。
- (26) 『聖書』「新共同訳」共同訳聖書実行委員会、日本聖書協会、一九八八年。
- (27) 北森嘉蔵「神はあるか」現代宗教講座 第一巻「創文社」、一九五四年、五三頁。
- (28) 奥村一郎『宗教対話と靈性交流』『奥村一郎選集 第2巻』オリエンス宗教研究所、二〇〇九年、二七頁。
- (29) 高田信良「仏教研究から見た宗教多元主義」前掲『宗教多元主義を学ぶ人のために』一五〇頁。
- (30) ジョン・ヒック『もうひとつのキリスト教——多元的宗理解』間瀬啓允・渡部信訳、日本基督教団出版局、一九八九年、一五五頁。John Hick, *The Second Christianity*, London, SCM Press Ltd., 1994, p.86.
- (31) 西田幾多郎『宗教哲学論文集』上田閑照監修、大橋良介・野家啓一

- 編集『西田哲学選集 第三卷』燈影舎、一九九八年、四二二頁。
- (32) ジョン・B・カプ・Jr『対話を越えて』延原時行訳、行路社、一九八五年、八八頁。
- (33) 中村元『比較思想から見た仏教』東方出版、一九八七年、一六七頁。
- (34) ヒック、前掲『自分史』『宗教多元主義の探求』堀江宗正訳、四頁。
- (35) ヒック、前掲『宗教多元主義』七七頁。原著、p.38-39。
- (36) 岸根敏幸は、レイスの類型は「キリスト教の立場に限定する必然性は「何もない」と述べている。同書、一二頁。
- (37) 例えばリチャード・ニーバーは「五つの類型」を提示している。H・リチャード・ニーバー『キリストと文化』赤城泰訳、日本基督教団出版局、一九六七年、七五―二八七頁。
- (38) 三位一体論を否定するキリスト教徒。
- (39) 信楽峻磨『宗教多元主義と浄土教』『比較思想研究』第二号、比較思想学会、一九九五年、一六頁。
- (40) ウェスレー・アリアラジャ『聖書と他宗教の人びと』中嶋正昭訳、日本基督教団出版局、一九八七年、一三八頁。
- (41) 武田龍精『阿弥陀仏とキリスト』武田龍精編『研究叢書』『親鸞思想と現代世界』Ⅲ比較を越えて』龍谷大学仏教文化研究所、一九九七年、二〇五頁。
- (42) ハーヴィー・コックス『世俗都市』塩月賢太郎訳、新教出版、一九七一年、二六頁。
- (43) 中村元『比較思想論』岩波書店、一九六〇年、三一九頁。
- (なんぶ・ちより、宗教学、大正大学総合佛教研究所研究員)